

<2015年度 第2回定期研究会>

患者家族のための病気とのつきあい方 — 医療現場のリエゾンとソーシャルサポート —

講演：保坂 隆（聖路加国際病院精神腫瘍科 部長）

日 時：2015年11月21日（土）

今回おいでいただいた保坂隆氏は、著名な「精神腫瘍科」の医師である。現在、聖路加国際病院精神腫瘍科部長・リエゾンセンター長を務められ、著作多数、非常に多忙な方であるが、仲立ちとなる方々のご助力があって研究会実現の運びとなった。この場を借りてお礼申し上げたい。

今回の演題である「患者家族のための病気とのつきあい方—医療現場のリエゾンとソーシャルサポート—」で挙げられている「リエゾン」こそが、今回の研究会の軸であり、それにかかわる活動が保坂氏のライフワークでもある。では、保坂氏の言うところの「リエゾン」とは何か。「聖路加病院リエゾンセンター」のホームページには、次のように述べられている。

「連携」を意味するフランス語です。内科や外科など各診療科との連携のもとチーム医療の一員として加わり、心も身体もトータルで診ていく機能のことです。同じ心のケアを提供する科であっても、心療内科・精神科・精神腫瘍科は独自の見方で診察し、独自の方法で心のケアを提供しています。リエゾンセンター開設により、3つの科とリエゾナーズ・臨床心理士・ソーシャルワーカーなどの多職種がそれぞれの意見を出し合い連携していく診療体制が、心のケアによりよい効果をもたらします。（聖路加病院リエゾンセンターホームページ「センター長ご挨拶」より）

研究会の冒頭では「リエゾン」について、上記のような「病院のリエゾン」のみならず、地域内の様々な主体間連携による「地域のリエゾン」にも言及しながら、保坂氏自身のリエゾン活動に対する思いが語られた（保坂氏は既に準備した自らの墓標に「Liaison」と刻んでいるという）。その後、サブタイトルのもう一つの項目である「ソーシャルサポート」、さらに世代ごとの生き方、患者本人・家族の病気や死との向き合い方へと展開していく。具体性に満ち、わかりやすさにあふれた保坂氏の講演から、印象的な話題をいくつかピックアップしてみよう。

① 3つのソーシャルサポートと「となりのトトロ」

ソーシャルサポートを「支え合い」とシンプルに定義した上で、「情緒的ソーシャルサポート」「手段的ソーシャルサポート」「情動的ソーシャルサポート」を解説。アニメ「となりのトトロ」において、トトロとねこバスが果たす役割は何かと問う。聴衆に考えさせ、また聴衆どうして話し合わせた上で、

トトロは「情緒的ソーシャルサポート」の役割を、ねこバスは「手段的ソーシャルサポート」の役割を果たしていたと指摘。「トトロは頼りない父親と病弱な母親を持った姉妹にとってのソーシャルサポートを教える医療ドラマである」との見解を示した。

②「がん=死」ではない

「統計から見て、がんに罹った人の3割ほどはがんで亡くなってはいない」と指摘。「がんは糖尿病や高血圧と同様の慢性疾患である。よって、がん=死と思いこんで、むやみにがんを恐れるのは間違っている」と述べ、その意味で「がんになってテレビで泣いている有名人がいたが、たいへん迷惑」と語った。

③「死に方」としてどちらが「お得」か

死後の世界はあるのかないのか。「どちらもエビデンス（証拠）に欠けていることから、“ある”とも“ない”とも言えない。ただ『死に方』として考えてみると、あると思っていた人にとって、思ったとおり死後の世界があった場合は楽しいし、なかった場合にも、『ない』わけだからそうとはわからない。一方で、ないと思っていた人にとっては、思ったとおりなかったとしても本人はわからず、誰に伝えることもできないが、もしあった場合には悔しい思いをする。なので、どうせなら『死後の世界はある』と思っていた方が『お得』なのではないか」と語った。つまり、「死後の世界はある」と思っていた方が、死に臨んで焦燥感も無力感もなく、やすらかに死と向き合えるのではないか、という保坂氏からの提案である。

保坂氏が語る言葉は、当然ながら専門である「精神腫瘍科」をベースにしたもの、つまりがん患者とその家族とかかわる医療に携わってきた専門医としての知識と経験に基づくものである。しかし、その本来難解で重いものであろう専門知識や現場経験が、保坂氏のソフトな語り口調とユーモアを交えた話術によって、誰しもにとって聞きやすく・わかりやすく・納得させられるトークに昇華されていたことは、参加者による積極的な質問や、研究会後のアンケートに好意的な意見が多く寄せられたことから見て取れる。

研究会の事前打ち合わせでは、保坂氏は参加者の属性を気にしておられた。筆者が「一般の市民、医療関係者、本学の教員や学生も参加します。年齢層も様々です」とお答えしたところ、「どこに照準を合わせた話にするか」と真剣に悩んでおられる様子に、保坂氏の真摯な姿勢がうかがわれた。講演内容の細部には異論を持つ向きもあったかもしれない。しかしそれは、多様な参加者に配慮した「聞きやすさ」「わかりやすさ」を優先する語りによるものだと理解できる。氏が「カウンセリングのやり方を話している」と自ら語っていたように、聴講者は、病を得た、あるいは死に向き合おうとしている自らへの「カウンセリングである」という姿勢で聞けば良い。筆者自身も、話を聞きながらまるでカウンセリングを受けているような印象を受け、いつまでも聞いていたいという感覚を持った研究会だった。

(研究会報告担当者：藤本延啓)